

# 民主主義発達 「正統」揺らぐ

国際基督教大の森本あんり・学務副学長が、「正統」と「異端」について宗教学の分野から考察した『異端の時代』（岩波新書）が刊行された。現代は正統の形が揺らぎ、社会の健全性に黄信号がともっている、警鐘を鳴らしている。（文化部 小林佑基）

出発点は、「反知性主義」の跋扈だ。知性と権力との結びつきを批判するという、反知性主義の本来の意味を解説したことで知られる森本氏は、既成の権威、つまり正統を破壊する反知性主義の行き着く先はどこかと考えた。時にアメリカでは、異端的なトランプ大統領が誕生していた。

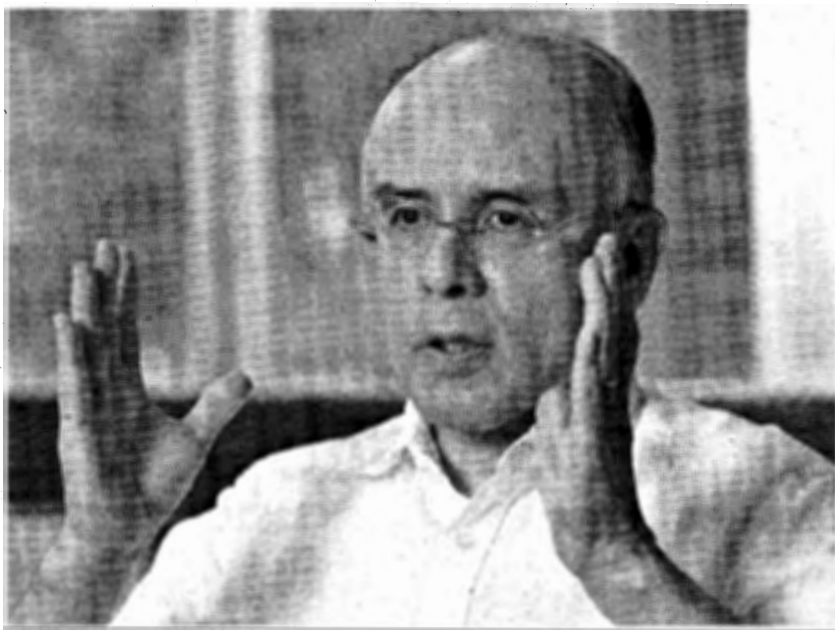
「正統と異端」といえば、政治学者・丸山真男による政治思想史からの研究が有名だ。

丸山は、血統の連続性などを重んじるタイプの正統より、教義や世界観から導かれる正統を重視していた。

だが宗教思想史から考察した本書は、正統はむしろ、論理的な定義や輪郭が不明確だと指摘。きちんとしたものでも、格式張ったものでもないとした。「あいまいで『何となく』なものだが、誰もが前提として疑われない存在が、正統。権力が作り上げるのではなく、気がつけばどっしりとしてそこにあるもの」と森本氏は強調する。

確固とした思想や信念を持

## 森本あんり氏 「異端の時代」刊行



「みんなが上手に取り繕っている外面の皮を、無理やりに剥がすようになっているのが現代だ」と語る森本あんり氏—宮崎真撮影

ち、世俗社会と一線を画すのは、むしろ異端の方だという。正統に迫害されるひねくれた存在ではなく、自らが正統を担うことの志を持って異議を唱え、潔癖で端正な者こそ、異端なのだとした。正統と異端のイメージが、鮮やかに覆される。そして最初はとがっていた異端の思想が、人々の支持を得るにつれて角が取れ、多くの人が違和感なく受け入れられる形になり、正統になるのだと説明する。

つまり、本来は人間の内面の問題である信仰を、教会や聖職者、正典といった地上権力・社会制度の形に変えてき

たからこそ、キリスト教などの宗教は長く続いて正統性を得られたとする。このような構図は、政治などでも同じという。

\* \*

そんな正統の形が揺らいでいるのが現代だと、本書は指摘する。「どこでも、いつでも誰にでも信じられていたかのように存在していた正統の信ぴょう性に、疑問符がつけられるようになったためだ。

背景には民主主義社会の発達がある。教育水準の向上やインターネットの普及で、人々は正統に対し声をあげやすくなり、批判力も高まった。情

## 情報公開で信頼性に疑問符／個人主義進み組織力弱化

報公開の広がりなどで正統のあらも見えやすくなった。個人主義の高まりや社会の多様化もあり、政党や宗教の意見集約力や組織力も弱まった。だが、正統がそこまで揺らぐと、貨幣に代表されるように、信認で成り立っている社会は壊れる。すべてを疑わなければならなくなるし、陰謀論もはびこるからだ。非常に暮らしていく窮屈な社会になるとする。

民主主義も同様に、人権尊重や多数決など複数の構成原理の一つに固執すれば、全体のバランスが取れなくなって瓦解してしまう。「英国の批評家・チェスタトン氏は『狂人とは、理性を失った人ではなく、理性以外のすべてを失った人だ』と言った。生真面目すぎない民主主義者でいた方がいい」

\* \*

正統の形が揺らぐ裏返しで、異端の形も揺らいでいる。異端を自任する多くの人が、正統を担う気概もないのに、宗教のような熱狂ぶりで体制を批判している。だがそれは、正義を体現しているような気分だけを味わう「なんちゃって異端」なのだとか。そして、トランプ大統領をはじめ、現代には真の異端がないと強調する。異端を好み、自らを正統とは言いながらない日本人の間にもいないという。「真正正銘の異端がないと正統も成り立たない。これからの正統と異端について、かしまらずに考えてほしい」と呼びかけている。